

Title	紅樓夢論争に對する批判
Sub Title	A critical note on the "Hung-lou-Mêng" controversy
Author	村松, 暎(Muramatsu, Ei)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1955
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.5, (1955. 11) ,p.75- 91
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00050001-0075

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紅樓夢論争に對する批判

村 松 暎

いわゆる『紅樓夢論争』の意義や經過については既にいくつかの紹介や解説が出ているので、ここでは紅樓夢研究の立場からこの論争の内容を批判してみたいと思う。

この論争は中國における紅樓夢研究の權威である俞平伯の論文をめぐつて行われたもので、その發端となつたのは、昨年（一九五四年）九月『文藝報』第十八號に載つた『紅樓夢簡論』およびその他について」という李希凡と藍翎という二人の若い學者の共同執筆になつた論文である。「紅樓夢簡論」というのは昨年『新建設』という雜誌の三月號に發表された俞平伯の論文で、李・藍の二人がこれを中心にして種々の方面から俞平伯の紅樓夢研究を批判したのである。李・藍は更に十月十日の『光明日報』紙上に『紅樓夢研究』を評す（『紅樓夢研究』俞平伯著一九五二年刊）という論文を發表した。ここまでは單に俞平伯の紅樓夢研究に對するマルクス主義文學理論による批判、紅樓夢についての新しい解釋がなされたというに止まるのであるが、この批判を十月末ごろに『人民日報』がとり上げてから、にわかには活潑なものとなつたのである。その第一陣は鐘洛の「紅樓夢研究中の誤まれる觀點に對する批判を重視せよ」（人民日報五四・一〇・二三）という論文で、この中で鐘洛は、李・藍の論文は「三十年あまり古典文學研究工作の中にあつた胡適之派の資産階級的立場、觀點ならびに方法に對して反撃を進行した第一彈、貴重なる第一彈である」といつている。たしかに第一彈であつたのであつて、これ以後は批判會が開かれる、新聞雜誌にはやたらと紅樓夢に關する論文が出るといつた鹽梅で、圖書新聞の解説によれば五カ月間に二百篇の論文が出ているというのだから盛大なものである。

さて、俞平伯はどんな點を批判されたのか、ということになれば、彼の紅樓夢研究が、胡適派反動資産階級的實驗主義的唯心論的立場、觀點ならびに方法によつてなされたものだ、というわけだ、つまりほとんど根こそぎ全部が批判されているのである。あらゆる點にわたつているので、これを説明するのは面倒なことで、整理が必要である。論文を順々に紹介してゆくのも一つの方法であろうが、俞平伯に對する批判者は皆マルクス主義という同じ立場でものをいつているので重複がはげしくゴタゴタすると思うので、發端の李希凡・藍翎の論文もその後のものもひつくるめて、その中から批判の要點をいくつかに分けて、それぞれについておべてゆくかと思う。

一番大きなことは、俞平伯が紅樓夢を作者曹雪芹の自傳だと見ることによつて紅樓夢の持つていける社會性を否定しているということである。

紅樓夢が作者の自敘傳だという説を最初に唱えたのは胡適で、俞平伯はそれを受けついで發展させたのである。胡適の自傳説の根據というのは、まことに大ざつぱなもので、これで説を立てるのは少々亂暴だというほかないようなのだが、とにかく自傳説を主張して、そこから紅樓夢は「平淡無奇の自然主義」の作品だといふのである。俞平伯は同じ立場から、曹雪芹の創作動機として紅樓夢第一回から次の三つをとり出している。一、作者は自分の境遇を歎いてこの書を作つた。二、情場懺悔のために書いた。三、十二釵（作中に登場する十二人の美女）の傳を作ろうとした。この創作動機についての俞平伯の説は紅樓夢の持つ社會性を抹殺するものだと痛烈に批判された。たしかに、中國の舊小説では、作者の語る創作動機をすべてそのまま信用するのは危険な場合がある。君子たるもの手を觸れるべからざる小説を敢て書こうという作者が、素直に眞實を語るとは限らない。往々にして、そこには韜晦の言がありかねない。この創作動機の問題については李・藍⁽²⁾、何幹之⁽³⁾、舒無等⁽⁴⁾が意見をのべている。舒無は「紅樓夢をたかだか作者曹雪芹の事業、個人のものとして見、一個の社會現象、社會的存在として見ない。……こつちつた孤立した、狹隘な、非社會的研究方法で作品の作られた原因を研究するのは、せいぜいあれこれの個人的な原因を探すができるだけである」。たしかに俞平伯の研究は作品の背後にある社會という問題を見落している。しかし、作者の創作動機は、それが社會に左右されるにもせよ、やはり個人の動機ではあるまいか。何幹之が創作動機的第一についていつている「もし果して曹雪芹が……才を懷いて不遇であつたことによつてこの書を

書いたのなら、それでは、これはつまり曹雪芹個人、あるいは曹家の問題であつて社會問題ではない、即ち紅樓夢の現實主義全體を否定することになる」という言葉も紅樓夢が社會小説だという前提に立つて物をいつているようである。小説を書くということは、なんといつても個人の仕事である。作者が意識的に社會問題を描こうとしない限り創作動機は個人的なものであり勝ちだろう。ことに乾隆朝の人である曹雪芹の創作動機の中に、どれほどの社會性が存在したかは疑問である。私自身の考えでは、俞平伯の掲げている創作動機の第一は、半ば當つており半ば外れている。作者は事實身の不遇を慨歎して紅樓夢の創作を思い立つたに違いないと思う。しかし、作者自らいつている「なにごともし得ずに落ちぶれてしまつた罪を天下に告白する」という言葉はそのままには受取り難い。作者は作品の中で、なにごともし得なかつた反俗精神を高唱しており、とても罪を告白してなどはないのである。中國の舊小説では、内容がどんなであらうと、前おきは精一ばい道德的なことが多いものである。

俞平伯は紅樓夢が作者の自傳であり、ありのままを描いたものであるということから、「作者の最大の手段は寫生である」「作者は一個の鏡にすぎない」といい、したがつて、事件の進行、つまり賈家が繁榮から没落に向うのも自分の家の移り變りを描いたからさうなつたのであり、作中の美しい少女たちが次々と不幸に陥つてゆくのも同様に事實を忠實に描いたからで、ここに紅樓夢が悲劇となつて在來の小説の舊套を打破した原因がある、書中の人物に對しても作者は鏡であるから通俗な芝居のように善玉惡玉を作らず、好惡の情をさしはさまず、多くの女性に對しても一視同仁の態度をもつて臨んでいる、という。

これに對する批判も、紅樓夢の社會性を無視しているということにある。紅樓夢は封建地主官僚階級の飽くなき搾取、淫亂と虚偽と罪惡とを暴露したもので、決して鏡のように無選擇に書いていたのではない。賈家の没落過程は曹雪芹の家の事實を寫したというような個別的なものではなく、當時の歴史條件の下に崩潰に向つていた封建地主官僚階級の典型がここに描き出されているのである。作中の多くの少女たちは、封建地主官僚階級家庭の權力者の壓迫によつて不幸に陥らされてゆくのだ。書中の人物に對して、作者は明らかに差別の眼を向けている。史太君、賈政、王夫人、王熙鳳、賈珍といったやうな封建地主官僚階級家庭の權力者および薛寶釵、襲人などの如きこれへの追隨者に對しては憎惡の眼をもつて描き、讀者にも彼等を憎むやうに仕向けている。一方、その反封建主義の故に、

封建闇黒勢力によつて虐げられた者、寶玉、黛玉、晴雯等を、作者は無限の同情をもつて描いている。ここには當時の歴史条件下の種々の矛盾が反映されているが、その最大のもは封建地主官僚階級内部の矛盾で、寶玉の封建闇黒勢力に對する闘争はその代表的なものである。寶玉と黛玉との純粹な愛情は封建闇黒勢力のために壓殺され、その結果黛玉は悲憤のうちに死に、寶玉は封建勢力との妥協を潔しとせず出家する。俞平伯はこの社會性を否定して、曹雪芹の原作の意圖は、黛玉の死は病死であり、寶玉は本来貧窮の結果出家するのだという。俞平伯はさらに、紅樓夢十二支曲その他で、作者が寶釵と黛玉とを並べているという部分的な事柄を提出して、作者は寶釵に悪意は持つていないと主張するが、物語全體から見ても、作者の寶釵に對する憎しみは明らかである。このように作品の傾向性を抹殺して、讀者の眼を政治から切離そうと企圖している。これは紅樓夢が過去において發生した巨大なる社會効果をことさらに否定するもので、これこそ反動資産階級唯心主義文學觀の特徴である。——ざつとこんな具合である。

古典文學作品を教育効果という點から見るとのこと——これにも問題はあるだろうが、そういう見方もあり、そういう見方もできるといふことは認めないわけにはゆかないだろう。しかし、ありもしないもの、あるいは不確實なことを強調宣傳するとしたら、これはインチキである。私自身としては、紅樓夢の作者はおそらく社會性を持たぬ人間だと思つて、作者の性格や意圖がどうあると、とにかく封建貴族家庭の腐敗や罪惡をも描いているので、この意味で紅樓夢が社會性を持つてゐるということも認めてもよいと思つた。

しかし、紅樓夢に描かれている賈家の没落は單に一封建貴族家庭の問題ではなく、歴史の轉換を豫告する階級の没落を描いているのだ⁽⁶⁾——というような説明をする場合には、乾隆のはじめごろに清朝の貴族階級が崩潰に向つていたという歴史事實の裏づけがなければならぬはずである。私は歴史のことはわからないから強いことはいえないのだが、新勢力の擡頭、舊勢力の衰退といった現象は、もつと後のアヘン戰争を経て太平天國の亂が勃發するころになつてからのことではないかと思つた。曾國藩のような實力派の擡頭は、舊貴族階級の衰退を説明しているのかもしれない。これと、康熙から雍正、乾隆にかけての貴族間の勢力の消長とは全く別のものだと思う。この時期には皇位繼承問題をめぐつて、いくつかの黨派が争ひ、その間に勢力の交替があつたが（曹雪芹の家の没落の原因にこの黨派争ひがからんでいたとみられる資料がある。——周汝昌『紅樓夢新證』）、これは同じ封建地主官僚貴族の間での勢力の消長であ

り、このようなことはいつの時代でもあることで、封建貴族階級全體が没落に向つてゐるというのには、その説明がなければならぬ。ただ乾隆時代は清朝の最盛期、爛熟期で峠を越えかかつており、既に衰退に向つてゐたという常識みないものだけでは、紅樓夢の賣家の辿つた運命が封建貴族階級全體の運命を反映してゐるというのには根據が薄弱であると思ふ。

紅樓夢にはたしかに二派の人物、封建禮教の正統派と、寶玉、黛玉などのような禮教からハミ出た性格の人物とが登場してゐる。しかし、寶玉の反封建闘争の意義を強調するというのは明らかに行きすぎである。寶玉がどこか一カ所でも積極的な態度を見せてゐるのならまたいいが、彼は女の子を相手に勝手な熱を吹く以外にはこれといつたことは一つもしていない。寶玉は唯美主義者で世紀末的な才子で、その意味では頑強に自己を主張して變えようとはしないが、決して「闘争」などといえるような積極的な行動のできる男ではない。李・藍は『紅樓夢簡論』およびその他について「の中で寶玉と黛玉との戀愛を「純粹な戀愛」といい、何其芳は「一對の眞摯な愛情」といつているが、これは少々註釋を必要とする。「純粹」だとか「眞摯」だとかいうと、寶玉はわき目もくれずに黛玉を愛したようにとられ勝ちだが、實は寶玉は大いにわき目をくれるのである。彼は早くから襲人と肉體關係を持つてゐるし、金釧兒についてフラフラするし、晴雯への情は召使を憐れむなどといつた程度のもではない。しかも、これらのことは彼の黛玉への愛情のさまたげには少しもならない。純粹であり眞摯でもあつて、そこにいささかの矛盾もないのである。寶玉の唯美主義は、若く美しい女性の美を最高のものとする。この美に憧れる心情に制限はあり得ないのである。俞平伯に對する批判者はこそつて紅樓夢の人道主義を云々する。天子は「作者はまた人道主義の精神をもつて、罪惡的奴婢制度に對して告訴を提出し……」⁽⁸⁾といい、毛星は「民主主義と人道主義の進歩的内容は紅樓夢の最も主要にして最も基本的な内容」であるといひ、また李希凡・藍翎も「寶玉の突出した性格は彼が封建官僚地主階級の叛徒であり、彼の中に豊富な人道主義精神があるということだ」といつている。寶玉が晴雯の病を見舞ひ、彼女の死に萬斛の涙をそそいだのは、なにも奴婢が不當な壓迫を受けたからというわけではなく、晴雯が大變な別嬪だからというだけの話である。これが婆さんだとか小汚い野郎だつたら、目の前でブン殴られてゐるのを見たところで、屁とも思ひはしないのだ。彼が身分の上下をあまり問題にしないのは事實だが、その代りに美醜を問題にするのである。

寶玉はやはり唯美主義の立場から心情を矯めることを厭う。俞平伯に對する批判者は、寶玉が仕官を卑しむことを反封建主義のよう
にいうが、彼が禮教教育や科擧制度に反對するのは別に系統立つた理論を持つてゐるからではなく、それが無味乾燥で心情の自然を矯
めるからという理由によるのである。寶玉には單調な面白くもないことを努力してやるなどということではできないのだ。寶玉は要する
に、黛玉をはじめとする美しい女の子にとり圍まれて、心地のいい部屋に住んで、おいしいものをたべて、氣儘に暮すことができれば
満足なのである。その快適な生活が農民の勞働の上に成立しているということまでは知つてゐるが、それを間違つたことだと罪惡だ
とも思ふわけではなく、勞働ということに關心を持つわけでもない。こういった男というものには、あまり積極的な行動は期待できな
いもので、まして鬭争などという柄ではない。黛玉との戀愛も、周圍の反對を押し切つて結婚したとでもいうならともかく、ズルズル
と寶釵と結婚してしまい、後になつて味氣なくなつて出家遁世したからといつて、反封建鬭争だと騒ぐほどのことはあるまい。山東大
學で行われた師生集體討論⁽¹¹⁾でも、寶玉、黛玉に對する過大評價に反對する意見が出てゐる。また、李・藍が寶玉を「當時まさに轉換せ
んとしている社會に、いまでも出現しようとしていた新人の萌芽」であり、社會に反抗した「英雄」だといつてゐるのも、何幹之や毛
星に誤りとして指摘されている。何幹之は、當時の社會の基本矛盾は地主階級と農民との矛盾で、農民革命が歴史の發展を推進したの
だから反封建の英雄、主將は當然革命的農民でなければならぬ、といふのであり、毛星は、この時代にはまた何等の新興資産階級も
現われていないのだから、したがつて「新人」もあり得ないといふので、いずれも李・藍のあまりの行過ぎに割引をつけたものであ
る。なお、山東大學の討論會では、紅樓夢の書かれた時代に資産階級が存在したかどうかといふことで討論が行われたが、結局結論は
出ていない。

俞平伯が、紅樓夢の中でいつも寶釵と黛玉とが並べられていることと、第五回、寶玉の夢の中に出てくる少女が寶釵にも黛玉にも似
ているところから、「寶釵合一」「兩美合一」といふことをいつてゐるのが人物形象を歪曲、混亂させているとして批判されている⁽¹³⁾
が、この二人は對照的な容貌容姿と性格とを持つた美人であり、寶釵は寶玉の妻となる女性、黛玉は寶玉の意中の女性といふわけで、
ともに寶玉をめぐる最も主要な女性として並べられているのであつて、この合一論は現存の小説から見る限りは俞平伯の誤解というは

かない。ただし翁平伯は、脂批に見られる曹雪芹の八十回以後の筋立として、寶釵と黛玉とが死後天界で一體となる、ということをも根據として合一論を唱えているのである。曹雪芹の原意は合一であつたかもしれないが、八十回以後が失われ、高蘭聖が續作をしたのが現存の紅樓夢で、雪芹の原意から外れたところもいく所があるわけなのだから、この現存の紅樓夢を一團に雪芹の原意をもつて解釋しようとするのは、やはり徒らに人物形象を混亂させることになるであらう。

とにかく、善玉と悪玉がはつきりしていなければいけないのである。敵か、味方か、というわけだ。翁平伯のように、「釵黛合一」だの「作者は作中人物に對して毀譽褒貶の意を持つていない」などといったのでは、この偉大なる傑作から學ぶべきものがなくなつてしまひ、紅樓夢は社會効果を持たぬ小説に墮して人民のものではなくなつてしまふことになる。舒蕪はいう「社會効果ということから見れば、紅樓夢は常に讀者を、黛玉を愛し寶釵を憎むようにしむけている」。昔から「右黛而左釵」という言葉があるくらいで、こういう見方はあつたのである。しかし、昔の右黛左釵と現在の右黛左釵とは違ふようである。昔の人は單純に寶玉と黛玉との戀を成就させてやりたいと願うために、その邪魔になる寶釵に好感を持たなかつたのだと思われるが、今のそれは階級的立場に立つていのである。寶釵は常識家で、文學少女で感情家の黛玉とくらべれば面白味はないが、別に憎むべき人物として描かれているとは思えない。一體に中國の舊小説では善玉と悪玉が大變はつきりしている。いいとなるとトコトンいはいばかりだし、悪い奴というのも心底悪くて明瞭この上ない。どうしても人物の性格が面的で單純すぎる弊は免れない。そこへいくと紅樓夢の人物の性格はもつと複雑である。賈瑞などという下司な野郎を書く筆と王熙鳳を描く筆とは同じでない。王熙鳳は慾張りで氣が強くて嫉妬心も強く、平氣で人も殺すような女だが、それでいて生々としていて悪人には描かれていない。紅樓夢の人物の中の面白い人物である。紅樓夢では、男と年とつた女は性格が面的で描き方も大ざつぱである。寶玉と若い美しい女性たちの描き方は、はるかに念入りで、微妙な心理の動きに至るまで逃さずに描いている。曹雪芹にとつては、まず美ということが問題だつたのであらう。その上で、黛玉や晴雯のような心の上でも寶玉と共通するものを持つている者と、寶釵や襲人などのような共通性を持たぬ者があるのは勿論だが、寶釵や襲人、鳳姐などにして、作者は憎むという氣はないと私は思う。

俞平伯が、紅樓夢の風格を「怨んで怒らず」だといっているのも、紅樓夢の社會効果を否定するものだと批判されている。俞平伯はこの點が、紅樓夢が水滸傳の過激であるのと違ふところで、優れた作品であるゆえんだといふのであるが、このような評價のしかたが、寶玉の反封建闘争を重視する人々の評價と相容れないのは當然である。李・藍は『紅樓夢簡論』およびその他について、俞平伯の紅樓夢に對するこの評價は、彼がこれを自然主義作品と見ることに由來しており、したがつて作中人物に對して作者は愛憎を表現して、現實生活に對して稱讚もせず批判もしていないことになり、實質上、紅樓夢の反封建的現實意義の減低を企圖していることになる。といつてゐる。鐘洛も「俞平伯は作者の書中人物に對する愛憎を否定して、その偏愛のないところが現實に對する『怨而不怒』であるとし、強硬にこの偉大なる現實主義の傑作を自然主義の庸俗作品に引下げてしまふ」と、同様のことをいつてゐる。『怨んで怒らず』とはいかにも古風な表現だが、水滸傳が爲政者への反抗を直接描いてゐるのや、金瓶梅が人間の獸性を露骨に描寫してゐるのにくらべれば、紅樓夢は貴族家庭の腐敗を描いてゐるとはいへ、それは主題ではないので、暴露小説といつた直接的なものではなく、この意味で水滸や金瓶梅のような激しさはないといえる。「怨んで怒らず」といふ俞平伯の表現が、まつたく的はずれとはいえないと思う。ただし、激しいの激しくないの、露骨だ婉曲だといつたことが小説の優劣の標準にはならないので、過激でないから紅樓夢が水滸や金瓶梅よりもすぐれてゐると簡單にいつてしまふわけにゆかないのは勿論である。俞平伯はこのほかにも紅樓夢のすぐれた點として、大自然を描いていない、といふことを擧げているが、文學に對する⁽¹⁴⁾こゝいつた評價のしかたは、彼が正統派文人のサロン文學的教養をうけ繼いでゐることを示すものであらう。俞平伯の弟子の王佩璋が「先生は資産階級思想だけでなく、没落士大夫階級思想の殘滓をも持つてゐる⁽¹⁵⁾」といつてゐるが、これはうなずけることである。

とにかく、「釵黛合一」だの「怨んで怒らず」だのといつたりしたら紅樓夢の社會効果は臺なしである。社會効果といふのは一般大衆に與える教育的効果の意味であるようだ。ところで、批判論文は「紅樓夢が過去において發生した巨大な社會効果」といふようなことをいふのだが、私はこれについて疑問を持たざるを得ない。社會効果といふのが、廣く大衆に愛讀されたといふだけの意味でないのは「社會効果の面から見ると、紅樓夢は主として讀者を現實人生を肯定する方へ導くものであり、主として讀者を愛憎と幸福とを

闊いところのようにと鼓舞するものである⁽¹⁶⁾。「……すでに發生したような積極的教育作用……『紅樓夢』が百年あまりの間中國人民の精神生活方面に發生した巨大な影響は……」⁽¹⁷⁾ などとあることによつて知られる。しかし、彼等は紅樓夢が過去において發生した社會效果の具體的な例は一つも擧げない。ただ發生した發生したというばかりである。たしかに紅樓夢は過去百年あまりの間、非常に廣く讀まれ、大きな影響を社會に與えた。その具體的な例としては、續作が非常にたくさん作られたということ、紅學と呼ばれる紅樓夢研究學が發生したことがある。しかし、これらの續作は、いずれも紅樓夢を戀愛小説としてのみ見て、悲劇に終つてゐる原作を、寶玉と黛玉とが結ばれてめでたしめでたしという結末に變えてあるのだし、紅學はこれまた作中人物のモデルの穿鑿に終始して、作品内容の分析などというようなことは考えてもみない有様である。現在いつてゐるような意味の社會效果があつたことは、これまで知られていないのだから、あつたというなら、なにか別の例を示してもらわないことには納得がゆきかねるのである。

「紅樓夢簡論」で俞平伯が紅樓夢の主要觀念は色空の思想だといつたことも批判的になつてゐる。李希凡・藍翎は『紅樓夢簡論』およびその他について「で、色空觀念で紅樓夢を解釋することの誤りを指摘し、紅樓夢の主要部分は積極的な意義を持つてゐるのであつて、色空思想の如き落後的要素をもつて解釋するべきでないといつてゐる。また何其芳も、やはり色空思想の存在は認めながら、それを誇張して見ることをいまして」「この作品の中では作者の思想中の積極的な要素と現實主義的創作方法とは、彼の思想中の消極的な要素に完全に戰勝してゐる」といい、さらに紅樓夢が色空の思想を持つた理由は、曹雪芹が當時の歴史條件の制約の下においては反封建的叛逆者にとつて社會に出路が残されてゐないことを感じたからであると説明してゐる。

毛星の「俞平伯先生の色空説を評す」は表題の如く、この問題を専門に論じたものであり、これを見ると俞平伯の「色空説」の根據があらかた知られる。それは、紅樓夢第一回の「空空道人ついに空によつて色を見、色によつて情を生じ、情を傳えて色に入り、色より空を悟り……」の一段、第五回の「紅樓夢十二支曲」第二回、跛脚道人の「好了歌」と甄士隱のこの歌の註解、第十二回の風月寶鑑。こういったところであるらしい。毛星はこれらのことをもつてしては紅樓夢の主要觀念が色空であるとするには足らぬとして退け、やはり紅樓夢の積極的な面を重視すべきことを強調した後、寶玉の出家は當時の社會に對する抗議であると同時に、出路を見出た

せぬことの一種の表現だと、何其芳と同様の説明を與えている。

たしかに翁平伯が紅樓夢の主要觀念が色空であることの證據として擧げているものは批判者の指摘するように個別的細節であつて、これだけをもつて紅樓夢全體の主要觀念を云々するのは誤りであり、全書をもつて判斷しなければならぬであらう。しかし、紅樓夢の物語全體を見る時、現實世界の裏に天上世界といったものが大きく存在しており、また主人公賈寶玉の出家も現世をすてて天上界に歸するのであり、この出家の原因が、美しい女性たちの不幸な結末（その中には黛玉の死が寶玉の心に最も大きな影響を與えたのであることは勿論である）を見、また自らの家が繁榮から没落に至つた有様を見て、この世への執着を失つた結果であるのだから、細節のいかんにかかわらず、色即是空といつたものが相當大きく存在していることは否定できないであらう。簡單に消極的成分として退けてしまつてよいほど小さなものだとは思えない。また、色空的なものが存在する理由としての、現實社會に「出路」が見出せなかつたといふことには私も全面的に賛成だが、これだけで説明が足りたとも思えないのである。私の見るところでは、寶玉は唯美主義者である、これは前にのべたが、寶玉の理想美の具現者たちは次々と亡びてゆく。美は現實世界に安住の地を持ち得ない。しかし、作者にとつては美こそ眞であり永遠のものである。彼は美を現實の世界ではなく天上界のものとするこゝによつて永遠のものとしたのだ。美の信徒たる寶玉も、黛玉をはじめとする美しい女性たちも、みな天界から降つたものであり、また地上をすてて天界に歸するのである。現實世界は假のものであり、天上世界こそ眞のものであるといふ色即是空的なものは、この意味で作者の唯美主義思想を支えている骨格である。これを曹雪芹は「色空」といふ佛教用語で表現し、翁平伯はそれをそのまま佛教的に解釋し、批判者もそのままうけついで解釋するので、ひたすら消極的なものと見なすことになるのだが、この一見色空的な現世否定的なものが、紅樓夢の中では美を永遠のものたらしめるという積極的な役割を果しているのである。

翁平伯が色空思想が紅樓夢の基本的なものだといふ證據として「風月寶鑑」も手きびしい批判を浴せられてゐる。この鏡は表側を見ると別嬪が映り、裏側を見ると麝娘が映るもので、跛の道士が賈瑞にこれを渡す時に「必ず裏だけを見るように、決して表を見てはならない」と注意する、賈瑞はそれを表側ばかり何度も見てその都度慾情を發し、精力を使い果して死んでしまふ。翁平伯は、この

挿話は紅樓夢の読み方を作者が示しているのであつて、紅樓夢は裏から見なければならぬのだといつてゐる。

裏から見ると、というのは、はつきりしないいい方である。天界と下界との關係をよく考へて讀めという意味かと思ふと、そうではな
いらしい。もつと端的で「表面に強調している美人は假のもので、反面の嚮儂こそ眞のものだ」といつてゐる。舒蕪は「これはつま
り、俞平伯先生の見方によれば、紅樓夢は主として讀者を人生を否定する方へ導き、愛情と幸福とを否定するものだということにな
る」と説明している。そういうことになるかどうか知らないが、「嚮儂こそ眞のものだ」というのは一體どういふ意味なのだろう。何
其芳は、この挿話は「賈瑞の如き一類の愛情のなにもたるかを知らぬ好色の徒のためだけに書いた」ものだといつてゐる、これでは
お説教じみて聞えるが、まあそういつたところで、毛星もいつてゐるように第五回の警幻仙姑の「淫」の解釋、寶玉のような「意淫」
と賈瑞のような「皮膚濫淫」とを區別したものだらう。李・藍が『紅樓夢論』およびその他について「で指摘しているように、俞
平伯はこの點を混亂させているのであつて、戀愛性慾について曹雪芹の説くところが矛盾しているようにいふのは俞平伯の誤りであ
らう。

「風月寶鑑」もその例であり、批判も多くその點を指摘しているが、俞平伯には、個々の情節にとらわれ、それをとり出して單獨に
解釋し、しかもその解釋を物語全體にまでおし廣めようとする傾向がある。このために、とんだ間違ひをせる場合が少くないのであ
る。俞平伯はもともと胡適の流れを汲む文獻學派で、その本領は考證にあるといわれている。しかし實際には、この方面で彼がやつた
仕事のうち、見るべきものは意外に少いのである。今度の批判でも俞平伯の考證には役に立たぬものが多すぎるといわれているが、こ
れは事實その通りである。聶紺笄が「紅樓夢の八十回以後が高鶚の續作だということも胡適の方が早く『紅樓夢の新材料』でいつてゐる。彼の、後四十回
の回目もまた高鶚の作だという考證は、完全に無意味な煩瑣主義の傑作だが、それでも『壽怡紅翠芳開夜宴圖說』⁽¹⁹⁾よりはマシだ」といつ
ているが、これはまことにその通りである。因みに、「壽怡紅翠芳開夜宴圖說」といふのは紅樓夢第六十三回の宴會で、女の子たちが
どういふ順序で席についたかという、その席次の綿密な考證である。

餘冠英の「『微言大義』か、それとも穿鑿附會か？」⁽²⁰⁾という論文は、俞平伯が小さなことをさも意味ありげに解釋し、しかもそれがとんでもない誤りをおかしていることを指摘したものだ、その指摘はすべて正確である。俞平伯も最近はせいぜい新しいことをいうように努力していたようで「紅樓夢簡論」にも「公衆の意見は結局において正確である」などという言葉があるらしいが、餘冠英の論文からもそのことが察せられる。俞平伯は紅樓夢の持つている批判性を強調して、人民大學での「紅樓夢の現實性」という題の講演で「自分ははじめ紅樓夢にかくの如き強い批判性があるということはいわなかつたが、近ごろ研究の結果敢ていう」といつている。こういう觀點から彼は「紅樓夢の一大特點は微言大義の筆法にある」というわけだが、彼の擧げる例はいずれも微言は微言でも大義の方は穿鑿附會になつてしまつてゐる。今、餘冠英の論文の中から、そういう例を一つだけとり出してみる。紅樓夢第七十六回の尤氏の笑話に出てくる四人の子というのが、實は寧國公の四人の子のことで、この話は尤氏が賈家の祖先を嘲笑諷刺したものであり、「作者之意深切著明」だと俞平伯はいうのである。尤氏の笑話というのは「ある家で四人の子が生れ、一番目は一つ眼、二番目は一つ耳、三番目は鼻の孔が一つ、四番目は全部そろつていたけれど、これはオシだろう」という、どこが面白いのかよくわからないような話なのだが、この四人の子というのが、第二回、冷子興の話に、寧國公に四人の子があつた、というその子のことで、尤氏は賈家の祖先にアテコソリをいつているのだ、というわけである。これに對して餘冠英は、冷子興の話が出てから七十六回の尤氏の笑話まで、寧國公の四人の子については一言も觸れられていない、この二つの話に共通するものは四人ということだけだ、また尤氏が賈家の祖先に不満を持ついわれも書かれておらず、賈母もこれを聞いて少しも刺戟されずに寝てしまふ、この諷刺は人物の身分性格とも、またその時の情景にも適合しない、といつてゐる。まづたく、どこからどう思いついてこの二つを結びつけたのかわけがわからない。

俞平伯は『紅樓夢研究』の中で「私は紅樓夢は中國文學上の夢魘であるといつた、研究すればするほどわけがわからなくなる」といつている。批判者はこれを、俞平伯が重箱の隅をホジクつてそれに大きな意味をつけて作品を解釋しようとするためで、このような資産階級唯心論的實驗主義的研究方法によれば、このような「不可知論」に陥るのが當然で、彼はこのようにして多くの讀者を迷わせたのだ、といつてゐる。

紅樓夢第八十一回以後の高鸞の續作に對して俞平伯は徹底的に否定的である。第一に、作家にはそれぞれ個性というものがあるので續作ということとは不可能だというわけだ。第二に、高鸞の續作は種々の點で曹雪芹の原作の意圖に反している。筋の上からも文章の風格からいつてもこのことがいえると、非常に細かい證據を、前八十回の中からと脂批の中とからとり出して指摘している。⁽²²⁾ 第一の點についての批判は、要するに、紅樓夢は既に長年の間、高鸞の續作をも含めて百二十回のものとして人民大衆に愛讀されてきたもので、これを否定することは即ち紅樓夢の發生した巨大な社會効果を否定することである、俞平伯の考えは、文學作品を個人のものであるとしてのみ見て社會的存在として見ない資産階級唯心主義的なものである、ということになる。⁽²³⁾ 何でもかでも悪いものはみんな資産階級唯心主義のセイにしてしまふので困るが、これはたしかに俞平伯が無理なことをいつているので、古典の場合、他人のつけ足しがあつても、それで全體が一つの作品として存在してきている時には、それはそれとして認めてゆくべきものだと思う。原作が續作者によつてどう變えられたかというような研究は勿論必要だが、ただやたらに續作だから氣に入らないというのは無茶である。聶紺弩もいつているが、續作をとり去つてしまつて、その代りに俞平伯先生の、原作者の意圖としてはこれから先こうなるはずだという考證をつけてもらつたつて面白くもありはしない。第二の點については聶紺弩が詳しく論じている。簡單にいうと、——細かい點で續作が原作の意圖と違つているなどということはない。問題は續作がいかに前八十回に現われている諸矛盾を發展させているかということである。この點、高鸞の續作は一二の缺點はあるが、全體として前八十回中の諸矛盾を十分に發展させ、時には俞氏の考證による曹雪芹の原意より以上にこの矛盾を立派に展開している。俞氏によれば、黛玉は寶玉の結婚よりも先に病死するはずだし、寶玉の出家は貧窮によることになる、この點などは明らかに高作の方がすぐれている。また俞氏は、高鸞の文章は前八十回にくらべれば拙劣で、前八十回のような穩かな風格もなく、賈家の人々の黛玉に對する態度も前八十回にくらべると、これが同じ人かと思うほど冷酷だと非難している。しかし、高鸞の文章が曹雪芹の文章より拙劣だというのは認めるとしても、前八十回のように穩かでないというのは、物語がすでに結末に近づいて、事態が緊迫してくるのだから、文章が以前ほど穩かであり得ないのは當然である。また賈家の人々の態度の變化も、矛盾が極點にまで發展して、それぞれの人物がその惡刺な本質を暴露するのだから、これもそうあるのが當り前だ。黛玉との戀仲

を引裂いて、寶玉を寶釵と結婚させようとする賈家の人々が、黛玉に對して冷酷なのは當り前である。

以上の批判には、その表現は別として、私も大體同意見である。俞平伯は細かいところにひつかかつて、續作に對して苛酷な態度をとりすぎている。大ざつぱりにいつて、この續作は非常な土出來だと思つう。

最後に、紅樓夢の傳統性の問題。李希凡・藍翎の『紅樓夢簡論』およびその他について一によると、俞平伯は「紅樓夢簡論」で、やたらといろいろなものを引きあいだにして、これが紅樓夢の傳統性だといつてゐるらしい。一、紅樓夢の主要觀念は色空だが、これは金瓶梅からきたものだ。——李・藍はこれに對して、金瓶梅の影響はたしかにあるが、この二者は現實主義作品であつて、その主要觀念が色空だということはあり得ないと否定している。また俞平伯が『紅樓夢研究』の中で、紅樓夢は金瓶梅から脱胎したものだ、といつてゐるのをとり上げて、李・藍が「俞氏は自ら紅樓夢は作者の自傳だといつておきながら、一方こんなことをいうのは矛盾しているではないか」といつてゐるのは、もつともない分である。二、——俞平伯はまた、紅樓夢の數カ所で黛玉が西廂記を引用しているのや、書き方に似てゐるところがあるという理由で、紅樓夢は西廂記に源を發している（源本西廂）といつてゐる。これに對しても李・藍の意見は、紅樓夢は現實主義作品だから、某一作品にもとづいてゐるなどということはあり得ない、というのである。三、——俞平伯はそのほかに、またいくつかの例を擧げて、紅樓夢は左傳、史記、樂府詩詞、莊子、離騷など古典文學の傳統を繼承しているといふ。これについて李・藍は、例えば作中で妙玉が莊子について語つたからといつて、すぐさま傳統性だなどというのは間違つてゐる、作者の文學的教養と傳統性とを混同しては困る、といつてゐる。たしかにその通りで、「個々の情節」にとらわれて誤りをおかす俞平伯の癖がここにも出てゐるのである。四、——俞平伯はそのほかに、紅樓夢と西廂記、西遊記、水滸傳、金瓶梅などの書き方の類似點をさがし出して、これらから換骨脱胎したとか一脈相連だとかいつてゐる。これについては李・藍は、もうなにをかいわんや（我們不想再加分析）だといつてゐる。

たしかに、さらに古い文學作品の影響をうけてゐるということが、そのまま文學の傳統性ということにはならないだらう。李・藍は文學の傳統性の意味を説明して「現實主義創作方法の繼承と發揚、人民性の繼承と發揮、民俗風格の繼承革新と創造」だといひ、さら

に「紅樓夢が古典文學を繼承し發展させたのは、特に小説中の人民性の傳統である」といつている。これにつづいて「人民性の傳統」の具體的説明がある。「それ以前の小説にも少なからず暴露的性質を持った作品、たとえば話本中のある種の小説と明代の偉大なる小説金瓶梅などがある。これらの作品が暴露している社會惡も相當に深刻ではあるが、しかしその廣度はまた十分とはいえない。紅樓夢に至つて、作者は封建官僚地主階級の生活内容をえぐり出し、さらに進んでほとんど封建制度の全部の問題にまでわたつてゐる」。つまり人民性とは社會惡の暴露といふことであるらしい。どうも李・藍の説明を聞いても私にはスツキリと納得がゆかない。中國文學の傳統の中には、李希凡・藍翎だけでなく俞平伯に對する批判者たちの氣に入らぬ性質の傳統もありそうだし、またそういった傳統が紅樓夢の中に流れこんでいるような氣がする。たとえば、文人の文學といつたものである。これなどは人民性とはあまり縁が濃くないが、こういうつた流れが中國文學の中には大きく存在しているのではないか。紅樓夢には、たしかに暴露的な性格もある。しかし、それだけでないのも事實である。

とにかく、この傳統性という問題は、中國文學全體にわたること、私の手には負えない。これは現在のところ、いかんともなしたいことである。

俞平伯は『文藝報』五五年第五號に自己批判の文章を發表して、自己の誤りを全面的に認め、新しい出發を誓つてゐる。俞平伯の紅樓夢論争の場合は彼の研究の傾向が問題にされたのであつて、人としての彼の身邊には何等の影響もなかつたようで、胡風の場合と全く異なるのである。要するに、紅樓夢論争は、新民主主義革命後にも舊態依然、胡適の流れを汲む資産階級的な研究方法が支配的であつた古典文學研究を、社會主義的研究方法に切りかえるための實物教育だといふことができる。ひと足おくれで古典文學研究の革命が行われたのである。革命につきものの行過ぎも部分的にあつたが、それも時の經つにつれて、それなりの落着きを見せてきている。だからといつて、それがすべて私どもの眼から見ても妥當なところへ落着いたともいえない。中國で行われている紅樓夢の解釋を、無批判にそつくりそのまま頂戴しなければならぬ義理合は私どもにはないのである。

〔註〕

(1) 昭和三〇・四・二「紅樓夢論争その後」竹内實

(2) 「評『紅樓夢研究』」

(3) 『人民文學』五五年一月號「五・四」以來胡適派怎樣歪曲了中國古典文學」

(4) 『文藝報』五四年二〇號「堅決開展對古典文學研究中資產階級思想的鬭爭」

(5) 『紅樓夢研究』

(6) 李希凡・藍翎「評『紅樓夢研究』」——買家の衰敗は一個の家庭の問題ではなく……全封建官僚地主階級が、逐次形成されつつある歴史條件の下に必然的に崩潰に向う徵兆なのである。

舒蕪「堅決開展對古典文學研究中資產階級思想的鬭爭」——紅樓夢は實際には當時の全社會の巨幅畫面であり、當時の全封建制度の一觸即發の内在危機を反映している。

鐘洛「應該重視對『紅樓夢』研究中的錯誤觀點的批判」——一個の封建貴族大家庭の崩潰と死亡との必然性を説明し、また全封建制度の崩潰と死亡とを豫告した。

(7) 『人民日報』五四・一一・二〇「沒有批評・就不能前進」

(8) 『文藝報』五四年二〇號「略談『紅樓夢』」

(9) 『人民文學』五五年一月號「評俞平伯先生的『色空』說」

(10) 「評『紅樓夢研究』」

(11) 『人民文學』五五年二月號「我們對於『紅樓夢』的初步認識」

(12) 「評『紅樓夢研究』」

(13) 李希凡・藍翎「關於『紅樓夢簡論』及其他」

舒燕「堅決開展對古典文學研究中資產階級思想的鬭爭」

何其芳「沒有批評·就不能前進」

(14) 『紅樓夢研究』

(15) 『人民日報』五四·一一·三「我代俞平伯先生寫了哪幾篇文章」

(16) 舒燕「堅決開展對古典文學研究中資產階級思想的鬭爭」

(17) 『人民文學』五五年一月號、聶紺弩「論俞平伯對紅樓夢的『辯偽存真』」

(18) 『文匯報』五四·一·二五「我們怎樣讀『紅樓夢』」

(19) 『紅樓夢研究』

(20) 『人民文學』五五年一月號

(21) 『大公報』香港五四·三·三〇「讀紅樓夢隨筆」

(22) 『紅樓夢研究』

(23) 舒燕、聶紺弩。前揭